



2026年5月7日  
近畿大学附属高等学校  
神野 学

## IB教育がもたらす成果：合科探究プロジェクト「ファイナル・ステージ」を通じた知の統合

### 1. はじめに：試験の先にある「真の学び」を目指して

国際バカロレア（IB）教育の核心は、単なる知識の習得ではなく、教科の枠を越えて知識を統合し、複雑な現実社会の課題に対して主体的に向き合う「探究心」の育成にあります。本校では、DP2年生が最終試験（Final Exams）を終えた後の期間を「ファイナル・ステージ」と位置づけ、これまで積み上げてきた学びを再定義する「合科探究プロジェクト」を実施しました。

このプロジェクトの目的は、試験という枠組みから解放された生徒たちが、IBの理念である「学習者像」や「概念的理解」に立ち返り、自らの学びをデザインする経験を積むことにあります。



「星の終末」をモチーフにした作品の説明

### 2. 実践の概要：教科の境界線を越える試み

2025年11月から12月にかけて実施されたこのプロジェクトでは、以下の3つのペアによる合科授業が展開されました。それぞれのペアは、単なる2教科の組み合わせではなく、現代社会に繋がる「Big Question」を設定し、探究を深めました。

- **[英語 × 化学]：科学の発展における言語の役割** 「科学的な分析や発展において、英語はどのような役割を果たすか」という問いを軸に、環境問題（原発処理水の浄化等）を英語で探究しました。生徒たちは、専門的な内容を英語で理解・発信する難しさに直面しながらも、他国目線で物事を考える視点を得て、自身の中に潜む「先入観（Preconception）」や「バイアス」を自覚する契機となりました。



原発処理水の浄化を簡易的に再現した実験

- **[歴史 × 数学]：過去の事例に基づく戦争発生モデルの検討**  
「過去の戦争事例に基づき作成した簡易モデルには、どのような価値と限界があるか」を考察しました。歴史的な事実を数学的な統計や確率の観点から分析することで、「1%でも可能性があることなら、議論する意味があるのか」といった、知識の本質や知ることの限界に迫る議論が展開されました。
- **[日本語 × 美術]：文学と美術の融合による意味の拡張** 「文学を美術的なモチーフとして扱うとき、詩の多様性はどのように拡張されるか」という問いに対し、詩の解釈を2次元や3次元の作品へと昇華させました。生徒は言葉の意味を視覚的な表現に落とし込む過程で、他者の解釈と交流し、自らの視点を相対化させるプロセスを体験しました。

### **3. 生徒の変容と教育効果：クリティカル・シンキングの深化**

オーディエンスとして参加した生徒(高校1,2年生)の振り返りからは、IB教育がもたらす具体的な成果が鮮明に浮かび上がりました。

第一に、「**概念的・本質的な理解の深化**」です。例えば、[歴史×数学]の授業を受けた生徒は、歴史における客観性の欠如を指摘し、それを数学的アプローチで補完しようとする試みに「知ることができない知識は存在するのか」というTOK（知の理論）的な問いを見出していました。

第二に、「**主体的な学びのデザイン**」です。生徒たちは教員から与えられた課題をこなすのではなく、自らプレゼンテーションの構成を練り、劇を交えたり聴衆を巻き込んだりする工夫を凝らしました。これにより、心理的な安全性を保ちながら深い問いを共有する場が、生徒自身の手によって創出されました。

第三に、「**実社会との繋がり**」です。環境問題や国際紛争といった正解のない問いに対し、複数の教科の知見を総動員してアプローチすることで、学校での学びが実社会の課題解決に直結しているという実感を生徒たちに与えました。

### **4. 結びに代えて：教員と生徒が共に創る学びの形**

本プロジェクトは、生徒だけでなく教員にとっても、自らの教科を「概念的に捉え直す」貴重な機会となりました。教員同士が協働して授業を設計することで、教科間のシナジーが生まれ、それが生徒の「深い学び」へと還元される好循環が見られました。

IB教育の効果とは、単にディプロマを取得することではありません。それは、教科という壁を取り払い、自らの思考を拡張し続ける「一生涯の学習者」としての土台を築くことに他なりません。本校の「ファイナル・ステージ」での取り組みは、その確かな一歩となったと確信しています。